

## フィールドワーク 木津川・煤谷川リバーウォッチングと精華町タウンウォッチングに参加して

7月21日(月)海の日で祝日、今回は6月18日の河川塾で「木津川・<sup>すすたに</sup>煤谷川沿川における水辺空間と人との関わり、その変遷を探る」をテーマに語って頂いた下村先生率いる京都造形芸術大学環境デザイン学科木津川チームのフィールドだ。

参加者は、南氏、澤井氏、小川氏、富田氏、藤原氏、佐藤氏、佐藤(侑)氏、佐藤(勝)氏、大滝氏、西河、そして案内は京都造形芸術大学の下村先生、岡田さん、福留さん、藤本さん、洪さん、野村さん、道下さん、永留さん。

まず、午前11時に京都府精華町の近鉄電鉄狛田駅に集合。いつに無く時間通りに集合できたメンバーは、木津川チームの案内で早速、煤谷川(一級河川)沿いに下流の木津川合流点めざし出発。



一級河川煤谷川



河川工事現場の解説

川の断面を見つけるや否や澤井先生の川の構造など簡単な講義が始まる。加えて京都府の河川を管理している大滝氏より河川の種別なども。この辺の層の厚さは水の塾ならではのもの? 河川改修現場では、工事期間中のミティゲーションについて少し議論も。



煤谷川沿いに東に下り、木津川との合流点手前で、前回河川塾で話題となった「廃墟」を確認。ここに辿り着くまでがひと苦労。竹やぶの中を突進する下村先生とは別に安全なコースを選ぶにも結局、雑木林の中を全員が川の中へ。皆で辺りを見学し、恐らくは昔クロスしていた立体交差の水路の後、という感じが。



水量の少ない煤谷川下流部



煤谷川最下流部のなぞの廃墟

あまりここで時間を取っては、飯が食べぬ・・・など考えてここをUターン、出発の近鉄京都線を越え、続いてJR東西線を横断し（ここでは初めての経験であるが、歩行者道路を進むとそのまま踏切も信号機も何も無い生の線路に遭遇、これを不安げに渡ると即、国道（結構交通量が多く危ない）、廃線の鉄道橋跡を煤谷川に確認。荒れ果てた線路と枕木がひっそりと、川に横たわっている。前後の地上部はとうの昔に用途替され道路になっていた。



JRの横断 踏切も何も無く線路を横切る



昔の鉄道橋跡（前後は廃線後、撤去され道路になっている）

更に川沿いを西に遡り、ため池を経由しながら煤谷川を観察した。ここから川に別れを告げ町の方へ。まずは下粕で木津川チームのメンバーも昔遊んだという、水路を観察。この辺で既に時計は午後1時を回っており、皆口数が少なくなりかけていた。引き続き北稲八間（きたいなやづま）の町へ。



新聞山高帽が一際、暑い日差しである事を感じさせてくれます



木津川チームメンバーも子供の頃遊んだ下粕の水路

ここでは古い萱ぶきや土塀の旧宅が残っており、落ち着いた風景。ここで万屋よろずやを発見、事務局よりアイスクリームをご馳走になり一休み。少し進んで、ようやく昼食。既に午後2時。公民館の駐車場・公園と各自思い思いの場所で弁当を広げ息を吹き返す。30分ほど休憩の後、南稲八妻（みなみやづま）のまちを散策し、途



中谷戸のため池も観察し、一路東に進路を変えJR・近鉄の祝園(ほうぞの)駅を越した所で一息(今回は事務局より酒屋で買った氷と紙コップでカチワリのサービス)。この頃、暑さと疲れのせいか皆黙々と最初の興味津々とは逆に、直進あるのみ。一気に木津川の用水機場へ。



森の学校を思い出すような北稲  
八間から南稲八妻への道



用水機場



排水機場

この辺りが、木津川チームが淀川～木津川を縦断する自転車道のサイクルステーションの提案を考えた地点。この頃京都の空が怪しく、防災担当の大滝氏は落ち着かない様子。続けて木津川左岸の堤防を下流に向い北進、排水機場を観察。(同じような施設が隣接している事に素朴に疑問。入りと出を単純に一つの施設で何とかならんのかな、は僕のひとりごと)ここを最後にして、再び西に向い祝園駅で反省会。皆のマイリバーについてなど意見交換し解散。後で経路を測ってみると、10Km以上を歩いた。皆様、お疲れ様でした。



板堰



水路の交差

この町・川・水路を見て、直感的にまず川に水が少ないと感じた。よくよく考えてみると季節柄、全国どこでもそうだろうけど、主に農業用水に取られている(といっちは語弊かな)循環する水は主に農業用水路(小川)を伝わって要所で川に戻っているのだ、と改めて感心した。

次に「柵」がない。全然ない。家のそばでも柵がないのは何で? 都市部にすむ我々の周りでは柵のない川が珍しい。都市部で柵がなくなることはあるのだろうか? そして、水路のクロスがやたらに多い。廃墟もそうであったように、何らかの理由(過去の水争いであったり、水利権の区分であったりかな)で水の利用にルールがあったのだろう。ダブルの鋼製スピンドルが付いた巻き上げ式の立体交差水路も初めて見た。

視点を換えれば精華町のごく一部を見ただけではあったが、下粕から北稲八間、南稲八妻への美しい町の風景、遠景は恐らく昔から変わらないいい景色であろう。田園の中を走る鉄道、昔どこにでもあった風景かも知れない。緑溢れる棚田や丘の風景からは河合雅雄・隼雄ら兄弟の「森の学校」を思い出した。ゆっくりと時間が流れるのに対し、新しくできた道路と道行く車だけがいやに慌しい都会と同じものを感じさせた。精華町は京阪奈丘陵の京都側で流域は淀川、丘の先に見える奈良市側が大和川である事が当たり前ではありながら、堺に住む私にとって、ちょっと不思議な感じがした。(西河記)